

# 「質実剛健」って何？

角田邦重 学長

Kunishige Sumida

×

聞き手 学生記者

江部理恵＋深尾ちひろ

Rie Ebe

Chihiro Fukao

## 学長とお茶の関係……

——昨年11月に新学長に就任されて新学期を迎えました。そこであるお聞きしたいのですが、学生の立場からは「学長」のポジションや日常がなかなか見みえませんが、学長になれる前と後でどんな変化があるものなのか。授業はもうなさらないのですか。

角田邦重 いや、やっていますよ。学長といっても、法学部の教員、教授というのは変わらないんです。ただ、忙しいから毎週の授業はできなくて、学長に就任してから代役を立てました。ゼミと大学院はやってますし、新学期からも大学院と学部のゼミは持つことになっています。

——学長になってお忙しい？

角田 忙しいね。

——中大生の集まるインターネットのサイトで、「学長は毎日お茶を飲んでるイメージしかない」という声も載っていました。

角田 エッ、そう（笑）。

——どんな仕事をされているのかもう少し具体的に。

角田 大学の経営については理事

会があり理事長が責任者、教育・研究体制については学長が責任者です。と言っても、では具体的に何をやるのかよくわからないでしょう（笑）。中大はすごく民主的で学部自治だから、学部のことは学部で決めて、学長は学部間の連絡、調整役じゃないかと長く考えられてきた。ところが時代の変化は激しいから変わってきた。大学や学部を超えたいろいろな問題への対応です。

イトーヨーカ堂社長、セブン・イレブン会長の鈴木敏文さん、キャノン社長の御手洗さんはともに中大の出身で、それぞれ流通、電機業界の勝ち組。時代の変化をちゃんと読み取りながら、強力なリーダーシップで会社の体質を変え、この不況の中にあって見事な経営の舵取りに成功している。大学も同じじゃないか。

最近、日本の国債の格付けもどんどん下がっているけれども、大学の格付けは非常に低い。そこで世界の大学と対等に負けないような研究を遂行していけるような、それぞれの分野でトップクラスの大学だけに毎年1億円、5年計画で5億円を助成するCOEプログラムが始まって

いる。去年、いろいろな大学がそれに応募して、中央大学も1件パスした。——理工学部・辻井重男教授を長とする「電子社会の信頼性向上と情報セキュリティ」ですね（「ゼミの風景」参照）。

角田 ええ、そうです。中央大学はその分野でトップ30の中に入っていると、世間に思われるようになる。早稲田は5件通ったとか、同志社や明治はゼロだったとか、そういう見方をされるようになる。これは1つの学部の対応では駄目で、大学全体がどこまでそういう研究体制を備えているか。学長のリーダーシップは

どこまであるのかが問われてくる。そのためには、いろいろな学部を超えた素晴らしい先生たちの協力によって、世界に負けない研究ができ

るんだとアピールしていく。それを僕のところはやらなければならぬ。昔は、お茶でも飲んでいけばよかったですかもしれないけれども（笑）、今は学長が先頭に立って汗を流さないと駄目な時代。だから大変（笑）。——お茶どころか……わかります。このインタビュも前の会議で開始が1時間ほど押されています。学長から見て私たち学生のイメージはどうですか。

### まじめな中大生

角田 さて、またえらい質問だ（笑）。学長になって、急に学生の見方が変わるなんてことはないですよ。だから一般の学生に接している大学の教員として答えると、やはりまじめ。本当にまじめ。



すみだ くにしげ  
昭和16年、佐賀県生まれ。中央大学法学部卒。53年中央大学法学部教授(労働法)に。平成3年—7年法学部長。平成14年11月中央大学学長に就任した。

1 回ぐ  
らい女子大で教えてみたいと思っ  
ている先生  
たちが多  
いから（笑）、  
実は4年制  
の女子大に

法学の科目を教えに行ったことがある。

授業開始で教室に入ると、前の休み時間の延長で私語が続く、僕が教壇の前で始めますと言っても全然関係ない。よく見ると、後ろのほうで編み物している人がいる（笑）。中央大学で教えていて、そんな学生はいないもの。仮にしゃべっていたら、出て行ってくれと先生が言うよね。

——はい、言われますね。

角田 言うでしょう。元法学部のある先生は「無礼者！」と言ったことがあった。僕はそこまでは言わなければいけません。でも、ちょっとやめてくれとは言わね。そうするとハツとしてやめるでしょう。中央大学だからそうなんだという感じがする。

最近の大学生は……ってテレビ番組でやっているでしょう。教室のイスの上でふんぞり返って何かやった、通路に座りこんで物を食べ始めたり、ガムがいっぱい落ちていたり。あるいは、近所の人たちから学生の通行を拒否されたり、通学路に大学の職員が行って、交通整理をしたりしている大学もあるでしょう。中大はそうじゃない。昔から質実剛健と

言われている。

学風について言えば、イギリス的な合理主義、経験主義、あるいは個人の自由などが挙げられる。一方、校風という生徒の持っている個性とか、中大に集まっている生徒の特徴は、質実剛健というのが当てはまっている。

### 古くありません？ 質実剛健

——昔は「男大生」でしたけど、今は女性が約3割にも増えました。でも昔も今も「質実剛健」。ちょっと古めかしくありません？ 語感も……（笑）。

角田 質実剛健は、何も男に習えというのではないよ。最近も男性が床屋に行かないで美容院に行ったっりするでしょう。そういう点では、男・女という分化がジェンダーもなくしていかなければならない時代に入っている。女性の華やかさだけ、あるいは「私、女性なのよ」ということだけで得ができるような時代ではなくなっている。だから女性の視点から見た質実剛健のあり方。そういうものを追求していったいいんじゃないかな。

## 18人の若き創設者の物語 「中央」の由来

——「質実剛健」の伝統はどこに発するのでしょうか。

**角田** 質実剛健の「質」は質素という意味。対極にあるのは青山や上智をイメージしてもいいけど、少しゴージャスとかブランド物というか(笑)。「実」は誠実、きまじめという意味。剛健の「剛」は、気概とか、意思の強さ。「健」は健康。いつてみれば、華美に走らない、ぜいたくをしない、そして意思を強く持つて誠実に専門的な知識を身に付けましょう。そういうものです。

元商学部の佐藤進先生(名誉教授)にもらった文書に興味深いことが書いてありましたよ。

大学の創設者というと、早稲田は大隈重信、慶應は福沢諭吉、一方うちはそのようなスターがいらない(笑)。18人の若い法律家が創設し(明治18年)、その中の初代の校長が増島六一郎。この人がイギリスに渡った頃、ブルジョア階級が力をつけていた。富はあるけれども身分はない、この人たちが大学教育を自分たちにも開

放すべきだと、大学拡張運動をやっていた。その頃に留学して、これに目覚めた。例えば、夏期大学講座。大学教育を地方の人や一般の市民の間に広げなければならぬという思いが最初からあって、授業料は安い、夜働いている人でも来られるようにする、通信教育をやる。

もう一つ、しばらくして中央大学という名前に変えた(明治36年)。中央の名前の由来は、東京・神田錦町は日本の中央だから、といった説もあるわけですが、増島氏が学んだのはミドルテンブルという法律家を作る大学で、「中央」の名前はミドルという文字をもらったんじゃないかと言わうわけ。最初にできた学校が、赤レンガで向こうのミドルテンブルの校舎に似ている。

——はじめて聞く話です。

**角田** 佐藤先生の意見に、なるほどと思った。中央大学の伝統にある「家族的情味」というのは、18人の今風でいうとカンパニー、一人の偉い人がいるのではなくて、みんな力を併せて何かをやるよという精神。

そうすると、先ほど言った質素だとか、あるいは誠実だとかがすぐく生

きてくるでしょう。それは大事だなと思ってる。

——中大生はまじめだなというのは私も感じています。飛びぬけて力をやる学生とか問題児みたいな人はいないような気がしますが、先生の目では。

**角田** 問題児はどここの世界でも必ずいるんです。僕は労働法でしょう。人事をやっている人に聞くと、どの組織でも2割はほかの人にぶら下がってまじめにやらない人がいる。しかし、その2割の人を「お前いらぬ」と切ってしまうと、また2割できてしまう。そういう人が出てくるのは間違いない。

むしろ問題だなと思うのは、まじめさの半面で、チャレンジ精神に欠けるところがあるのではないか。堅実すぎて石橋をたたいてしか渡らない。あるいはたたいているうちに壊してしまう。そういうまじめさがあるかもしれないね。それは大いに不満。

——なにか身につまされます。

**例えば、渡部君、藤原君のこと**

**角田** それは今に始まったこと

じゃない。OBもそう。昔から中央大学の卒業生を見ていると、問題を整理し、対策を立てて、問題が起らないように処理したり予防したりする総務とか人事などの分野で力を発揮している人が多い。営業、企画とか華やかな分野で脚光を浴びる部門では早稲田が目立っている、とかね。早稲田の人は「おれは早稲田だ」と言うのに、「おれは中央だ」と名乗る卒業生が少ない。何かのときに、「君どこ」と聞かれて「僕、中央」と初めて答える(笑)。もつと誇りを持つていいと思う。胸を張って「おれは中央だ」と。

それでもいろいろな分野でチャレンジする学生がいる。例えば「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」の渡部一実君などは蓮池薫さんの拉致問題をやってきて、産経新聞主催の土光杯の弁論大会でも優勝しているでしょう。

あるいは3月のびわ湖毎日マラソンで初マラソン歴代最高、日本学生最高記録で3位(日本人トップ)になり、8月のパリ世界選手権に出場することになった藤原正和君。走り終わった後のインタビューで冷静に、

しかし臆することなく抱負を語る姿に、中大の伝統の神髄をみる思いがしましたよ。

まじめで中大生らしく質実剛健。しかし、柔らかさを持っている。行動力を持っている。スケールも大きい。ああいう学生を見つけて、もっと褒めることをしなければ。そういうことがすごく重要だと思いますよ。

### ロースクールで法学部は？

——来年、法科大学院が開校します。法科大学院ができることで、法学部も変わる、どのようになるのだろうか、というのが関心事です。

**角田** 司法制度も変わってきて、いままでだと修習が一年半だったのをこれからは一年に。給与も公務員として払っていたのが奨学金制度に代わる。修習をなくすわけにはいかないけれども、期間も短縮したい、お金もやりたくない。こういう流れのなかで、それを法科大学院でやってくれというふうになっている。ロースクールは、実務への導入教育の部分を担うわけです。

——そこで、大学はどうなるのかという問題がありますね。

**角田** ロースクールに行ってから法曹のための教育を受けなければならない、という考え方があつた。しかし他方では、法科大学院は3年ですが、実務修習の要素も一部に入っていて、法律を全然知らなかった人たちが3年間でどこまで質を上げられるのか、質の程度から見れば、いままでの司法試験合格者に比べて落ちざるを得ないだろう、品質低下は避けられないと考える人たちもいる。僕は、こちらのほうが当たっているんじゃないかと思つて危惧している。例えば

まったく法学を勉強していない他学部の人たちに、1年間で、訴訟法を含む基本六法、こういうのを詰めこむ、といつても、現在は法学部で4年間かけてやっているのにできるはずがないじゃないですかと僕は思う。——簡単にはいかない、ということですね。

**角田** そう。そこをクリアするためには、学部で法学教育の基本的なものも習得して、それが現実はどう運用されているか、応用する力が必要なんですね。

法学部を卒業すると2年間で済むから、それを法科大学院でやつても

らえればよいと思う。あるいは3年まで学部において、飛び級で法科大学院に入つてそこで3年やる。場合によつては2年ですむかもしれないけれども、それも可能だという。そういうやり方を取れば、今の質を保証できるでしょう。その前提は、やはり大学で、少なくとも将来法科大学院に行きたい、ロースクールに行きたいと思う人たちにはむしろ法学教育をちゃんとやらなければならぬ。

法律学科は1学年約800人ですが、うち6割ぐらいの人が司法試験を受けたらどうか、弁護士になりたいて入ってくる。これが2年生、3年生に進むと、最後は大体2割ぐらいになる。180人とか、200人ちょっと切れるぐらいが司法試験を受けたらといつて、あえて就職をしないで残る。この層はロースクールに行きたいと思つている層でしょう。この層の力を学部のと看につけてあげないと、中央大学のロースクールは立派なものにならない。

法学部の学生のなかで、7割が民間企業に行きたいと思う層。それに公務員、それから実務法曹になりたいてと思う層です。こう分かれてくる

選択肢をある段階から用意してあげなければならぬ。法学部の役割はそういうふうになっていくんじゃないか、あるいはしていくべきだというのが僕の考え方です。

公務員についても同じように行政大学院という方向がある。われわれも準備していますけれども、司法の世界が大学院を出た人なのに、日本の公務員だけが学部卒、はないでしようというのが行政政府のほうの考え方。日本の公務員は外国の公務員に対して質が高くない。社会的な専門の質がもっと高いものでないと、世界的な競争に日本がちゃんと立ち向かえないというわけです。

法曹の質もそうです。日本企業が外国に出ていっているいろいろな問題を起こすと、みんな外国人弁護士に取られてしまう。対応できない。あるいは知的財産権とか何とかいうと、アメリカが開発したものを勝手に日本は使うなどという感じになる。そういう問題について日本の弁護士で専門にやつてくれる人が少ない。日本は外国と対等にやつていけるのか、司法改革はそういう中で出てきていくわけです。

基本的にはロースクールに入ったあと、応用能力をつければ対応できるというレベルまでは学校でつけておかないと。ロースクールだけでうまくいくなんて思ったらとんでもない。

## 都心展開

——ロースクールは多摩ではなくて市ヶ谷のほうにできますね。どういう理由からですか。

**角田** ロースクールは、お医者さんから法曹へとか、エンジニアから法曹へとか、一度社会に出てさまざまな職業を経験した人呼びこもうという試みでもあります。例えば定員のうちの3分の1は法学部卒でない人を探ってくれとか、社会人枠を作ってくれとか、制度的な仕組みがそうなってくる。多摩だと下(中大)から上がってきた人しか通えない。

それだけではなく、キャンパスを市ヶ谷にする本当のところは、何も社会人を対象にするというだけではなく、学部のある学生についても外の世界をもっと肌で感じるような体験をさせてあげたい。インターンシップが盛んになってきましたね。ある

期間、例えば法律事務所で勉強していらつしやいとか(見学していらつしやいになるかもしれないけれども)あるいは企業を見学していらつしやいとか。こちら(多摩)にいると、本当にインターンシップのときだけ向こうに行つて、こちらに帰つてくるという感じになる。しかし、都心に拠点があれば、身近な場所でする場になる。そして教師がその体験をもっと理論的に整理して説明してあげる。そういう拠点ができれば、これはすごくいい。

理工学部が後楽園キャンパスにあるでしょう。これから考えなければならぬ文理融合型の研究や教育をやるためにも、もっと都心に場所がほしい。

——「都心展開」は新学長のビジョンの一つと聞いていいのですか。

**角田** 学長選挙の際にも揚げました。125周年の一環として実現を働きかけるつもりです。4年間こういう場所で勉強だけにまい進するのにも悪くないじゃないか。こういう考え方もあるんですよ。司法試験の勉強だつたら、雑音に惑わされず

と勉強するのもいいじゃないか。これも一つの考え方。だけど社会との接点、そしてそこから生まれる問題意識。むしろ、さまざまな体験をすることによって触発された問題意識をもっと抱えて同じ教科書を読めば、もっと違った読み方ができる。『書を捨てよ、町へ出よう』という寺山修司の本もあつたけれども。

本日は、皆さんが学んでいる法律だつて、あるいは経済だつて、社会の職業人が抱えている問題や産業界が抱えている問題と密接に関わっている。しかし、こちら(多摩)で勉強するときには、切り離されて、本日は本、向こうの社会の動きは動き、という感じになってしまう。

最近の文科省は、これを「新しい教養教育」と呼ぶ。古典的な知識を身に付けて、読みましようというのではなくて、どれだけ問題を自分で発見できるか。体験しなかったような問題に対して、どう自分として対応するものを持っているか。そうになると、多摩にこもつて勉強するだけというのは、生きていく社会に接する、自分の体験をもう一度持ち帰つて勉強の糧にする、そういう機

会が薄くなつてしまふ。インターンシップはそれを少しでも取り払おうという試みです。

## サルトルから六法全書へ

### 夜間部学生のころ

——話は変わりますが、学長の学生時代はどうでしたか。特に新入生のころというのは。

**角田** 僕は昭和36年に大学に入つて、40年の卒業。もう40年前です。初めから司法試験を目指していたわけではなくて、文学青年みたいな感じでした。当時は実存主義哲学というのがはやって、高校の時代からサルトル、ニーチェなどを読んでいたような青年だったんです。そのうち将来の進路のことを何となく考えて、じゃあ受験団体に入ろうかなと思つて、2年の秋ぐらいに入った。星友会という当時の夜間部の学生の会です。

僕は夜間部の学生で、初めは弁護士のところまで働きながら大学に通っていました。3年の夏休みぐらいに辞めて、丸一日中自分の時間になり、朝9時には学校に来て、机の前に座り、夜10時までには帰らない。弁当は自分

で作り、夕食も大学で食べる。お風呂も大学の近くの銭湯に入りに行く、そういう生活をしていました。それで4年生のときに司法試験に合格しました。今にして思えば、あの1年間半ぐらいが人生の転換点だったし、何か一つのこと集中する時間を持てたのはすごくいいことだったと振り返って思います。

我々の学生時代は、もちろん学生運動などあったから、そっちに一生懸命やる人もいる。ずっと受験勉強をやる人もいる。同じ受験団体



の中でも社会科学系の友だちに言わせると、法律は世の中が変わっていく後を追いかける学問。社会がどう変わっているか。どちらの方向に変わろうとするのかは、なにも法律によつて決まるわけではない。だから、社会は何で変化するのか、それを勉強しなければろくな法律家にはなれない、なんて批判された。そんなこと言つたつて、司法試験に受からなければ、そのこともできないじゃないかって、言い合つたりね。

僕が労働法を選んだというのも、労働法は最も法律らしからぬ法律だったからで、法律を勉強しながら法律を批判する。そういう勉強の仕方。それが最も社会科学的法律学というか、そういう分野だから僕は今でも続けられているんだろうと思う。

### 蓮池さんには勉学の機会を

——元中大生の蓮池薫さんの帰国については、『Hakumon ちゅうおう』冬季号で緊急特集をやりました。学長の立場で、あの問題についてどのようにお考えですか。

角田 蓮池さんは、中央大学の法学部の学生だったわけです。それで

拉致されて、帰つてこられた。できれば大学を卒業したいという希望のようだけれども、現実問題として、大変でしょう。まだ子供さんは向こうにいて自由な発言もできない。生活をしていくために柏崎の市役所に勤めるという道を選ばれた。

中大としては、通信教育で足りなかった分を補うのが一番いいのではないかと僕は思う。もう少し自由になつたらでしょうが。最近少し自分の考え方を言われるようになりましてね。大学におみえになる機会ができたら、大学としても勉強を継続できる機会を提供できたらと、そういうアドバイスもしたいと思つています。(蓮池さんが多摩キャンパスを訪れた3月14日は学長は中国・精華大学に渡航中で、直接会う機会はなかった)

### 中大の懐の深さ

——2月に完成した「白門プロムナード」はイマ風のデザイン。中大らしからぬオシャレな感じで驚きました(笑)。

角田 あれは21世紀の中大。広がり、ゆとり、そういうものを感じさせ

せますね。

——「白門プロムナード」を通つて受験し入学した新入生に一言お話しください。

角田 中央大学はすごく広くて大きいです。懐も深いです。何年前かに陸上の長距離で推薦で入ってきた学生がいた。その学生になぜ中大に來たのと言つたら、箱根駅伝中大が優勝した年(平成8年)、区間新を出した川波貴臣君という茶髪で長髪の学生をテレビの実況放送で見ました。体育クラブというと、丸刈りにしろとか、制服を着てとかやるのに、中大は、ネックレスをして茶髪で長髪で、それが箱根駅伝をちゃんと走ることができると、それに感激したという。中大は大きいな、自由だな。そういうのを中大は持つています。

白門プロムナードにしても、学生生活関連棟も中大の21世紀に合うような建物でしょう。広がり、ゆとり、懐の深さを象徴していると思います。恵まれた環境のなかで、自分を発見し、前へ進んでほしいですね。

——なにか元氣の話をうかがいました。「質実剛健」でがんばります。